

十二日記

七月十六日 月曜日 晴

朝起きると、おとうさんは、もう庭の朝顔のせわをしてゐられた。

「ほうら、こんな大きな、赤い花が二つ咲いた。」と、にこにこ顔。

學校では、三時間めに、三年生以上の合同體操があった。暑い夏の日が、かんかんてりつける中で、行進をしたり、かけ足をしたり、體操をしたりした。

七月十七日 火曜日 晴

けさは、朝顔が三つ咲いてゐた。水色が二つに、赤が一つ。

學校では、四時間めに、共同作業をした。ぼくたちは、校舎のうらの草をむした。先週の金曜日に抜い

昭和二十一年三月七日 翻刻印刷
昭和二十一年三月二十五日 翻刻發行
昭和二十一年三月七日（文部省検査済）

初等科國語一 第三学年用第一分冊

◎ 定價 金 五拾錢

著作權所有 發行權 文 部 省

東京都小石川區久堅町一〇八番地

翻刻發行 日本書籍株式會社

兼印刷者

代表者 大 橋 光 吉

東京都小石川區久堅町一〇八番地

印刷所 日本書籍株式會社

東京都小石川區久堅町一〇八番地

發行所 日本書籍株式會社

Approved by Ministry
of Education
(Date Mar. 7, 1946.)

に抜いた。としさんが「さっ。」といったので、見る

と大きなみみずがある。先生が、

「みみずぐらゐに、どうしてそんな聲をたてるので

す。」

とお笑ひになった。

七月十八日 水曜日 くもり

くもってゐたせゐか、朝からむし暑かった。朝顔は、二つ咲いてゐた。赤一つ、白一つ。

三時間めの合同體操の時は、汗でべとべとした。夏は、かんかんとてつた方が、氣持がいいと思つた。

夕はんがすんでから、おかあさんと、ねえさんと、

ぼくと三人で、えん日へ行つて、すす虫を買つてかへ

つた。ねる時には、涼しさうな聲で鳴いてゐた。

七月十九日 木曜日 晴

朝起きると、すす虫を見た。元氣なので、安心した。きうりを少しやった。

學校からかへつてみると、山へ行かれたをちさんか
らはがきが来てゐた。この前、手紙と小包をお送り
したので、そのへんじであつた。送ってもらつたつり
だうぐで、魚をつるのが楽しみだと書いてあつた。

七月二十日 金曜日 晴

今日は、海の記念日である。

朝禮の時間に、ラジオでも、そのお話があつた。教
室で、先生から、

「今日が、どうして海の記念日になつたのでせう。」
と聞かれた時、

「明治九年の今日、明治天皇が、明治丸といふ船で、
函館から、横濱へおかへりになつたからです。」

と、朝ごはんの時、ねえさんから聞いたことをお答へ
した。

ラジオは、一日中、海のお話や、音楽で、にぎやか

く、しかし、じつと月を見つめてゐますと、月は動かな
いで、雲が大急ぎで飛んで行くやうに見えます。

「お月様ではない。走つてゐるのは雲だ。」

といふ子どもがありました。

しばらくは、「月が走る。」「雲が走る。」と、たがひ
にいひはつてゐました。

みんながわいわいふのを、初めからだまつて聞い
てゐた一人の子どもがありました。その子どもは、こ
の時、みんなからはなれて、前の方にある木のそばへ
行きました。さうして、しばらく枝ごしに月を見てゐ
ましたが、

「ここへ来たまへ。雲が走るか、お月様が走るか、よ
くわかるよ。」

といひました。みんなは、木のそばへ来ました。

「ここに立って、お月様を、枝の間から見たまへ。」

十三 月と雲

月夜の晩、子どもたちが五六人集つて、かげふみを
して遊んでゐました。

そのうちに、月に雲がかかりました。月は、雲には
いつたかと思ふと、すぐ出、出たかと思ふと、すぐま
たはいりま。かうなつては、かげふみもできませ
ん。子どもたちは遊ぶことをやめて、しばらく月を見
てゐました。

すると、一人の子どもがいひました。

「あれは、お月様が走つてゐるのだらうか、雲が走つ
てゐるのだらうか。」

月は、今、雲から出て、大急ぎではなれて行きま
す。さうして、次の雲の方へ、どんどん走つて行きま
す。

そのとほりに、みんながしてみました。すると、月
は枝の間にじつとしてゐますが、雲はさつさと走つて
行きます。

「わかった、わかった。走つてゐるのは雲だ、雲だ。」
と、みんながいひました。

十四 つりばりの行くへ

はでりの命は おにいさま、
はをりの命は おとうとご。

あに神さまは つりのため、
おとうと神は かりのため、

毎日まいにち 海と山、

おいでになってをりました。

ところで、ある日のことです。

の命「にいさん、お願いがあります。」

の命「何だ。」

の命「にいさんは、毎日海へ出て、魚を取っていらっ
しやる。私は、毎日山へ行つて、鳥や、けもの
を取つてゐますね。」

の命「さうだ。」

の命「そこで、お願いがあるのですがね。」

の命「どういふことだ。」

の命「今日一日だけ、私に海へ行かせてくださいませ
んか、にいさんは、山へいらつしゃつて。」

の命「そんなことは、いやだよ。」

の命「たった、一日だけでいいのです。」

の命「いくら一日でも、いやだ。」

しまった。大きいのを逃した。

残念さうに、つり糸をいぢつていらつしゃつた
が、ふと、つりばりのないのに気がついて、
つりばりが無い。どうしよう、困つたな。ああ、
しかたがない。にいさんにあやまらう。にいさ
んはおおこりになるだらうな。」

三

の命「山へ行つても、小鳥一羽取れなかつた。おもし
ろくもない。さ、弓矢を返すよ。」

の命「まことにすみません。」

の命「何かつれたか。」

の命「ちつとも、つれなかつたんです。つれないどこ
ろか、申しわけのないことをしてしまひまし
た。」

させてください。」

の命「そんなに、つりがしたいのか。」

の命「さうです。私も、一度、あの大きな鯛をつつて
みたいのです。」

の命「では、つりをするがいいさ。しかたがな
い、わたしは山へ行かう。」

の命「ほんたうですか。」

の命「ほんたうだ。このつり竿を持って行け。」

の命「ありがたうございます。にいさんは、この弓と
矢を持って、山へいらつしゃい。」

二

の命「どうして、つれないのだらう。朝から、一匹も
つれない。」

その時、何かが糸を引く。

おや、引く、引く。ぐいぐい、引くぞ。しめた、

の命「つりばりを、魚に取られてしまひました。」

の命「取られたつて。」

の命「さうです。」

の命「——」

の命「どんなことでもして、おわびいたします。」

の命「おまへからいひ出しておいて、だいじなつりば
りをなくしてしまふなんて、あんまりだ。」

の命「ほんたうに、申しわけがありません。どうぞ、
お許しください。」

の命「いや、許すことはできない。」

四

ほをりの命は、海べで泣いていらつしゃる。

そこへ、一人の年取つた神様がおいでにな
る。

神様「もしも、あなたは、どうしてそんなに泣いて

いらっしやるのですか。」

命「はい、皆さんのだいじなつりばりを、魚に取られて、困つてゐるところです。」

神「それは、おきのどくな。私が、いいことを教へてあげませう。そこに、舟があるでせう。あれに、すぐお乗りなさい。私が、その舟を押してあげますから、しばらく、目をつぶっていらつしやい。すると、まもなく、きれいな御殿へお着きになるでせう。」

命「きれいな御殿。何の御殿ですか。」

神「海の様子の御殿です。その御殿の門のそばに、井戸があつて、井戸のそばには、大きな木が立つてゐます。あなたは、その大きな木にのぼつて、待つていらつしやい。」

命「さうすると。」

つて、

命「ああ、うまい水だ。ごちそうさま。」

六

正面に、海の様子が腰を掛けていらつしやる。そこへ、女が出て来る。

女「海の様子。」

神「何だ。」

女「門の前の木に、りっぱな神様がいらつしやいます。」

神「りっぱな神様か。」

女「さやうでございます。」

神「それでは、お迎へしませう。」

海の様子、はをりの命をおつれ申して、出ておいでになる。

神「どうぞこちらへ。」

でせう。さあ、舟にお乗りなさい。押してあげますから。」

五

海の御殿の門の前に、大きな木が立つてゐる。はをりの命は木を見あげながら、

命「はあ、この木のことだな。のぼつてゐよう。木にのぼつて、下をのぞくことになる。」

あ、井戸がある。きれいな水だな。」

女が出て来る。井戸の水をくまうとして、

女「まあ、りっぱな神様が、水にうつつていらつしやる。」

木の上を見あげて、女は、うやうやしくおじぎをする。

命「水を一口ください。」

女「かしこまりました。」

よくおいでくださいました。何か御用でございますか。」

命「じつは、海でつりをしてゐたら、つりばりがなくなつてしまひました。」

神「つりばりが。」

命「さうです。それは、兄のだいじなつりばりで、私も困つてしまひました。すると、年取つた神

様が、私に、海の御殿へ行くやうに教へてくれました。それで今ここへやつて来たのです。」

神「それは、ほんたうにお困りでございませう。さうさく、さがさせてみませう。」

女に向かつて、

魚たちを、みんなここへ呼び集めるやうに。」

女「はい。」

女は、魚たちをたくさん呼んで来る。

呼んでまゐりました。」

海神「これでみんなか。」

女「はい。鯛だけは病気でねてゐますので、ここへ

まゐつてゐません。」

海神「さうか。みんなの者にたづねるが、だれか、日

の神のお子様のつりばりを、取つて行ったものはないか。」

魚たち「ぞんじません。」

海神「いや、たしかにあるはずだ。だれか、知つてゐ

ふものはゐないか。」

魚たち「少しもぞんじません。」

海神「をかしいな。」

海神様は、しばらくお考へになつて、女に、では、鯛をちよつとここへ呼んで来てくれないか。」

海神「このつりばりでございますか。」

魚たち「あ、これだ。たしかにこれです。」

海神「はをりの命は、思はずにつこりなさる。」

海神「見つかつて、ほんたうによろしうございまして。」

「だいじな、だいじな つりばりが、

出て来て神さま およろこび。」

「いたい、いたいと 泣いてゐた、

鯛もよろこび おめでたい。」

めでた、めでたと さかなたち、

みんなまふやら 歌ふやら。」

女は、鯛をつれて出て来る。

鯛「何か御用でございませうか。」

海神「おまへは、日の神のお子様のつりばりを知つてゐないか。」

鯛「じつは、この間、つりばりをのどにかけまし

て、たいへん苦しんでゐるところでございまして。」

海神「あ、それだ。」

女に向かつて、

鯛ののどから、そのつりばりを取つてやれ。」

女「はい。」

つりばりを取る。

鯛「あ、これで、すっかりくになりました。」

女は、つりばりを水で洗つて、海神様にしあげる。

垂仁天皇の仰せを受けた田道間守は、船に乗つて、遠い、遠い外國へ行きました。

遠い外國に、たちばなといつて、みかんに似た、たいてうかをりの高いくだものがあることを、天皇は、お聞きになつていらつしやいました。田道間守は、それをさがしに行くことになつたのです。

遠い外國といふだけで、それが、どこの國であるかは、わかりません。田道間守は、あの國の島と、たづねてまはりました。いつのまにか、十年といふ長い月日が、たつてしまひました。

やつと、あるところで、美しいたちばなが生つてゐるのを見つけました。

田道間守は、大喜びでそれを船に積みました。枝についたままで、たくさん船に積みました。さうして、

大急ぎで、日本をさして歸つて來ました。

「さだめて、お待ちになつていらつしやるであらう。」
さう思ふと、田道間守には、風を帆にいっぱいはらんで走る船が、おそくておそくて、しかたがありませんでした。

日本へ歸つて見ますと、思ひがけなく、その前の年に、天皇は、おかぐれになつていらつしやいました。

田道間守は、持つて歸つたたちばなの半分を、皇后にけん上しました。あとの半分を持つて、天皇のみささぎにお参りしました。枝についたまもの、美しい、かをりの高いたちはなを、みささぎの前に供へて、田道間守は、ひざまづきました。

「遠い、遠い國のたちばなを、仰せによつて、持つてまわりました。」

映畫の幕は、

たつたあれだけなのに、

何萬トンの、はら、貨物船だ。

十七 聖德太子

聖德太子は、お生まれつき、たいそう賢いお方でありました。

ある日、太子は、御兄弟のかたがたと、お庭で遊んでいらつしやいました。みんな、お小さいかたがたのことですから、初めは、仲よくしていらつしやいましたが、そのうちに、何か、ちよつとしたことで、ついで、けんぐわが始まりました。

太子の御父君を、橘豊日尊と申しあげました。のちに、御位におつきになつて、用明天皇と申しあげる

になりました。田道間守は、聲をたてて泣きました。

泣いて泣いて、泣きとほした田道間守は、みささぎの前にひれふしたまま、いつのまにか、つめたくなつてゐました。

十六 映畫

映畫の幕は、

たつたあれだけなのに、

山がうつる、川がうつる。

映畫の幕は、

たつたあれだけなのに、

五階、六階、家が出て來る。

映畫の幕は、

お庭へ出てごらんになりました。

すると、お子様たちは、

「きつと、おとう様にしかられるにちがひない。」

とお思ひになつて、みんな逃げておしまひになりました。

しかし、聖德太子だけは、お逃げになりませんでした。お逃げにならないばかりか、つつしんで御父君の前へお進みになりました。

尊は、

「なせ、あなたは逃げないのですか。」

とおたづねになりました。

太子は、

「おとう様のお心にそむいて、けんぐわをいたしました。私たちでございます。橘をかけて、天へ逃げるこ

ともできません。穴をほって、地にかくれることも
できません。不孝のおとがめを、つつしんでお受け
いたすばかりでございます。」
とおっしゃいました。

橋登日尊は、太子のこのおことばを、お聞きになっ
て、たいそうお喜びになりました。

これは、聖徳太子が、四歳の御時のことであつたと
申します。

十八 養老

村の人が、二人で話をしてゐる。

村の人「もみちが、きれいになりましたね。」

村の人「たきのあたりは、すぬおんみことせう。」

村の人「ときに、あなたは、あの感心な子どものうはさ
を、お聞きですか。」

村の人「よくせいが出ますね。」

子ども「いや、まだいっかう役にたちません。」

村の人「おとうさんは、元氣になりましたか。」

子ども「おかげさまで、どうやらうちで仕事をしして
ります。」

村の人「それは何よりです。聞けば、あなたは、山で酒
を見つけたといふことですが、ほんたうです
か。」

子ども「はい、ほんたうでございます。この間、私が、
山でたきを拾つてゐますと、つい、足がすべ
つてころびました。起きようとすると、そのへ
んに、酒の香がいたします。ふしぎなことだ
と思つて、あたりを見ますと、石の間から、水
が流れ出てをります。それが酒でございます。

ものことせう。毎日山へ行つて働いて、歸り
には、年取つたおとうさんのすきなものを、い
ろいろ買つて來るといふことですね。」

村の人「さうです。その子です。その子について、この
ごろ、ふしぎな話があるのです。」

村の人「どういふ話ですか。」

村の人「なんでも、その子が、山で酒の流れてゐるとこ
ろを、見つけたといふのです。」

村の人「なるほど、それはふしぎな話ですね。」

村の人「さうと、子どもの孝心が、神様にとどいたのだ
らうと、みんながいつてゐます。」

村の人「それにちがひありますまい。」

村の人「おや、うはさをすればかげとやら、向かふから
あの子がやつて來ましたよ。」

そこへ、たきをせおつた子どもが、出て來

ですよ。まあ、おとうさんをだいじにしておあ
げなさい。」

子ども「ありがたうございます。では、ごめくださ
い。」

子どもは、おじぎをして歸る。

村の人「感心な子どもですね。」

村の人「ほんたうに。」

二人の村の人は、子どもの後姿をじつと見て
ゐる。

そのうち、この親孝行な子どもの話が、都にも傳は
りました。

おそれ多くも、時の天皇が、それをお聞きになつて、
わざわざ、そのところへお出ましになりました。さ

机の引出しを、かたづけてゐると、いつか、おちいさんにいただいた、古いめがねの玉と、おとうさんに買つていただいた、小さな虫めがねが出て來た。

「これは、いいものが見つかった。」と思ひながら、はくは、この二つを、重ねたり、別々にしたりして、机の上を見たり、外のけしきを、のぞいたりしてゐた。そのうちに、ふと、おもしろいことを發見した。

左の手にめがねの玉を持つて、目から遠くはなし
た。すると、向かふのけしきが、小さく、さかさまに
見えな。そのさかさまに見えるけしきを、大きくして

さあ、できたぞと思ふと、うれしくてたまらない。
うまく見えるか、どうか。

外をのぞいて見た。長い物が、ほんやり見える。二つの箭を、延したり、ちぢめたり、かげんしてゐるうちに、はつきりした。電柱だ。針金が、六本あることまでわかる。

もつと下を見る。屋根だ。しゃうじだ。おや、だれかが、しゃうじの間から顔を出してゐる。ぼくは、もう、むちゆうだった。急いで、おかあさんのところへ行つた。

おがあさんは、目をまるくして、

「何です。正男さん、大きな聲をして。」

「おもしろい。これで、いつか、おとうさんのお話に聞いた望遠鏡が、できるかもしれない。」かう思ひつくと、ぼくは、もう、じっとしてゐられなくなった。

ばくは、晝用紙を取り出した。さうして、その一枚をぐるぐると巻いた。ちやうど、めがねの玉が、はまるくらゐの大きさに巻いて、その一方のはしに、めがねの玉をはめた。さちんとはまった時、巻いた紙を、糸できりきりと巻いて、動かないやうにした。これで、一本の筒ができた。

次に、もう一枚の畫用紙を、ぐるぐると巻いた。さうして、さつきの筒の中へ、ちやうど、するするとな

「まあ、よく見えるね。でも、すっかりさかさまちやないの。」

「なるほどね。向かふの家のせんとく物が見えます。」

あ、人がこっちを見てゐる。森の米がきれいですね。」

しばらく見てゐられたおかあさんは、おっしゃった。

「おまへはえらいね。だれに教へてもらったの。」

ぼくは、
とくいだつた。

「だれにも教へてもらはないのです。ぼくが、考へて作つたのです。」

初等科國語一 第三學年前期用(第二分冊)

昭和二十一年四月二十日 翻刻印刷
昭和二十一年五月十日 翻刻發行
(昭和二十一年四月二十日交附省教育廳)

初等科國語一 第三學年前期用(第二分冊)
定價 金參拾五錢

著作權所有 發行者 文 部 省

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

翻刻發行 東京書籍株式會社

印刷所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

Approved by Ministry
of Education
(Date: Apr. 20, 1946)

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地

十 秋

ちんちろ松虫、

虫の聲、

庭の畠で

鳴きました。

ぎんぎら葉の露、

草の露、

月の光が

ぬれました。

とろとろもえる火、

のろりの火、

栗がはせます、

二十一 火 事

日がくれてまもなく、けたたましく、半鐘が鳴りだしました。

窓をあけて見ると、西の方の空が、まっかにそまっています。火事は、少しはなれた川向かふの町だと、すぐわかりました。おとうさんは、夜業をやめて、急いでしたくをして、家を出られました。おとうさんは、消防員なのです。

おとうさんを送り出してから、おかあさんは、

「火事は、をちさんのうちの方角だから、わたしは見まひに行きます。おとうさんは、消防の役目でお働

きになるのだから。」
といって、出て行きました。